厚生労働行政推進調査事業費補助金
（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業）
「かかりつけ薬剤師の専門性の検討とそのアウトカムの調査」

分担研究報告書

患者の服薬状況の問題解決を目的とした根拠に基づく処方提案等の実施に向けた取り組みに関する研究

研究分担者　益山　光一　東京薬科大学薬学部

研究要旨

患者が薬局に安心して相談できるための環境の構築に向け、まず、患者が服用する薬剤の個別の内容以外で、患者が薬局に相談したい内容を明らにするため、薬剤師へのアンケート調査を実施した。その結果、検査値、アドヒアランス、健康に関係する内容の相談が多いことがわかった。今後、検査値、アドヒアランス、健康に関する相談項目が多いことを患者に情報提供し、相談しやすい環境作りに関する調査研究のデザインの作成、健康については健康食品の情報収集方法手順等についてさらに調査を実施し、患者が安心して相談できるための課題の解決に向けて、引き続き調査研究を行うこととする。

A. 研究目的

薬局ビジョン作成の趣旨において、『ここで、「患者のための」としているのは、・・・・、医薬分業が本来目指す、患者・住民が医薬品、薬物療法等に関して安心して相談でき、患者ごとに最適な薬物療法をうけられるような薬局のあり方を目指すことを指している。』とされている。このような薬局を目指すには、まず、安心して相談できる環境が重要な要素の１つである。

本分担研究では、患者が日頃、個別の薬の問題のみならず、薬物療法等についてどのような点に負担や疑問等を感じ、薬剤師への相談が多いものは何を把握し、そのような相談について、適切に対応して信頼を得ることに関する調査研究を行い、「かかりつけ薬剤師」の更なる機能の検討及び必要な専門性や有用性などの具体的な内容や習得方法について分析、検証を行う。

B. 研究方法

１．　個別薬剤以外での患者の負担や悩みに関する薬剤師調査について

（１）調査対象

調査対象は、株式会社ファーマシィ、株式会社永冨調剤薬局、株式会社ミズ

（溝上薬局）、鹿児島県薬剤師会に所属する薬局薬剤師の 4 団体の合計 1,017 薬局、2,063 人である。

調査は、Web と紙媒体の二種類を用いて行った。電子メール、FAX 等で薬局に周知・配布し、回収した。用紙アンケートには、Web アンケートのホームページアドレス（URL）を記載した。

（2）調査項目

回答した薬剤師の基本情報（勤務地域、薬局での勤務年数、就労形態、在宅訪問の経験の有無、かかりつけ薬剤師の届出の有無）、次に、患者からの相談に関する設問については、薬局ビジョンに掲げられている「かかりつけ薬剤師・薬局が必要となる患者像」にそって、㋐：高齢者をはじめ、慢性疾患を有する患者（15 項目）、㋑：重篤あるいは高度な薬学的管理が必要な患者（7 項目）、㋒：妊婦や乳幼児を抱える患者（5 項目）に分類し、薬局ビジョン等を参考にし、個別の医薬品や薬物治療等以外の薬に関する幅広い患者負担や心配事についての相談内容を検討した。

（3）分析方法

Microsoft Excel 2013 を用いて、調査票の項目について単純集計を行った。それぞれの項目についての相談頻度を把握するために「よくある」と「ときどきある」を「ある」とし、また「ほとんどない」と「全くない」を「ない」としてまとめ、相談頻度の高い順に並べた。

2．　薬剤師調査を踏まえた更なる調査計画の設計

1．の調査結果を活用した相談対応の検討として、調査結果を活用した患者への相談対応の実施に向け、調査手法やその効果について測定を行うための検討や必要な課題解決等について検討を行う。

（倫理面への配慮）

薬剤師調査を実施するにあたり、東京薬科大学ヒト組織等を研究活用するための倫理委員会の承認を受けている。（承認番号 17-12）。

C. 研究結果

1.個別薬剤以外での患者の負担や悩みに関する薬剤師調査について

（1）　回答者の基本情報

回答のあった 786 人（38.1%）のデータを集計し、分析した。ただし 786 人のうち 15 人は無回答項目があったため集計から除外し、有効回答数は 771 人（37.4%）とした。基本情報に関しては、表 1 に示す。

表 1－回答者の基本情報

		人(%)			人(%)
勤務地域	北海道地方	0(0.0)	勤務年数	~5 年	214(27.8)
	東北地方	0(0.0)		6 年~10 年	170(22.0)
	関東地方	23(3.0)		11 年~15 年	155(20.1)
	中部地方	0(0.0)		16 年~20 年	111(14.4)
	近畿地方	57(7.4)		21 年~	121(15.7)
	中国地方	183(23.7)			
	四国地方	15(1.9)	在宅訪問の経験	ある	493(63.9)
	九州地方	493(63.9)		ない	278(36.1)
勤務形態	常勤	665(86.3)	かかりつけ薬剤師の届出	行っている	394(51.1)
	非常勤	106(13.7)		行っていない	377(48.9)

（2）患者からの相談内容について

患者像別に「ある」の割合が高かった項目を示すと、高齢者をはじめ、慢性疾患を有する患者では「血液検査の結果（見方など）について教えてほしい」（95.2%）、「いつまで薬を飲み続けるのか」（90.7%）、「医師には薬を飲めていないことを実は話せないでい

る」（87.3%）、「余っている薬を処分してほしい」（86.8%）、「患者さまやご家族の健康相談について」（83.5%）、「健康食品について」（82.2%）、「いつもと同じ薬なので病院に行かずに薬局で薬をもらえるか」（80.9%）の項目が高かった。また重篤あるいは高度な薬学的管理が必要な患者では「専門の病院はあるか」（66.5%）、「処方された薬や病状についての相談をゆっくりしたい」（60.1%）の項目が高く、妊婦や乳幼児を抱える患者では「妊娠期・授乳期の飲食物（薬以外）の相談」（46.7%）、「妊娠期・授乳期に健康食品を使用してもいいか」（32.2%）の項目が高かった（表 2）。

患者像間で比較すると、高齢者をはじめ、慢性疾患を有する患者からの相談内容が上位を占め、重篤あるいは高度な薬学的管理が必要な患者および妊婦や乳幼児を抱える患者についての項目は、相談頻度が低い傾向にあった。

表 2－調査票の設問内容と結果

質問事項	ある 人(%)	ない 人(%)
㋐血液検査の結果（見方など）について教えてほしい	734(95.2)	37(4.8)
㋐いつまで薬を飲み続けるのか	699(90.7)	72(9.3)
㋐医師には薬を飲めていないということを実は話せないでいる	673(87.3)	98(12.7)
㋐余っている薬を処分してほしい	669(86.8)	102(13.2)
㋐患者さまやご家族の健康相談について	644(83.5)	127(16.5)
㋐健康食品について	634(82.2)	137(17.8)
㋐いつもと同じ薬なので病院に行かずに薬局で薬をもらえるか	624(80.9)	147(19.1)
㋐医師にうまく伝えられない軽微な体調の変化ついて	609(79.0)	162(21.0)
㋐認知症の疑い（患者さまやご家族）に関する心配について	545(70.7)	226(29.3)
㋑専門の病院があるか	513(66.5)	258(33.5)
㋐いつも使っている薬が切れたが、病院が休診の間に使う薬を薬局でもらえるか	486(63.0)	285(37.0)
㋑処方された薬や病状についての相談をゆっくりしたい	463(60.1)	308(39.9)
㋐今さら医師には言いにくいことがある（薬や食べ物などのアレルギー等）	448(58.1)	323(41.9)
㋐剤形を変えられるか	422(54.7)	349(45.3)
㋒妊娠期・授乳期の飲食物（薬以外）の相談	360(46.7)	411(53.3)
㋐医師から後発医薬品へ変更不可と言われているが、実は後発医薬品を希望したい	348(45.1)	423(54.9)
㋑医師には言いにくい民間療法をしているがよいか	313(40.6)	458(59.4)
㋑処方された薬や病状について周りの人に聞こえないようにしてほしい	295(38.3)	476(61.7)
㋑医療費（薬剤費）の自己負担を減らす制度はあるか	293(38.0)	478(62.0)
㋒妊娠期・授乳期に健康食品を使用してもいいか	248(32.2)	523(67.8)
㋐患者さまやご家族から老老介護や要介護認定（要支援認定）について	243(31.5)	528(68.5)
㋒インターネットで見た情報（このワクチンは接種しない方がよいなど）の真偽	178(23.1)	593(76.9)
㋑実は薬で辛い副作用があるが、医師に言いにくい	132(17.1)	639(82.9)
㋒乳幼児のワクチン接種について	131(17.0)	640(83.0)
㋒乳幼児の検診について	78(10.1)	693(89.9)
㋑実はがんの薬物療法が辛いが、医師に言いにくい	62(8.0)	709(92.0)
㋐車いすをどこかで貸してもらえないか	40(5.2)	731(94.8)

＊㋐：高齢者をはじめ、慢性疾患を有する患者、㋑：重篤あるいは高度な薬学的管理が必要な患者、㋒：妊婦や乳幼児を抱える患者 に関する設問内容を示す。

２．薬剤師調査を踏まえた更なる調査計画の設計

（１）１．の調査結果を活用した相談対応の検討（簡易介入研究）

薬剤師調査と同様に、株式会社ファーマシィ等の協力を得て、慢性疾患の患者に対して、表 2 の調査結果を活用して、「同様な慢性疾患患者では、このような相談があるようですが、もし、同様な相談がありましたら、いつでも遠慮なくご相談ください。」といった話を服薬指導後に行い、その後次回や次々回での訪問時での相談状況について調査を行うこととし、調査計画を設定している。また、都心での反応も必要と考え、東京都内での調査対象についても調整を実施している。調査対象が固まり次第、本学の倫

理審査委員会での承認を得て、具体的な調査の実施を行うこととしている。

（2）血液検査の結果に関する相談の実施

血液検査の結果（見方など）について教えてほしいという相談が最も多かったことから、（1）の調査と併せて、「特に、血液検査等の検査結果で知りたい事やご相談があればいつでもお気軽にお尋ねください。」の旨の話を薬剤師から患者に積極的に実施し、その結果、どのような質問があったか、また、検査結果を見せてもらえる機会を活用して、腎機能のデータ及び体重等の情報について患者の了解をとって収集し、用量等の確認の実施を行うことを検討する。この調査についても実施に際しては、（1）と同様の手続きを行うこととする。

（3）健康食品に関する情報収集活動の検討

検査値やアドヒアランスの課題と並び、上位にあった相談が健康食品であった。

健康食品については、機能性表示食品等の新たな動きのある一方で、どのような情報を薬剤師が得て患者に提供すべきであるのか、検査値やアドヒアランスに比して、明確とは言えない状況もあり検討を行った結果、様々なデータや書籍等の中から、信頼性が高く利用の平易なデータとして、今回、国立健康・栄養研究所の『「健康食品」の安全性・有効性情報』のホームページ（ＨＰ）の活用方法について検討するため、同研究所の食品保健機能研究部の梅垣部長にインタビュー調査を実施した。その中で、『健康食品は有害事象が起きても服用者はそれが原因と気づきにくいし、医者にも言わない。なので「やめる」という判断、または「やめさせる」ということが難しい。HP に掲載される情報や情報源は論文となっていることが必須で、「誰が、何を、どの期間、どの程度の量」服用したが必ず明記され、安全性（動物試験でも可）、有効性（ヒト試験データに限る）が示されている。それであれば HP 情報と現在の服用状況を照らし合わせ、「やめる」（もしくは「やめさせる」）という判断がしやすくなる。』という HP の作成の趣旨を踏まえ、薬局薬剤師に活用しやすくなるような情報発信を検討することし、今後、「HP の歩き方」のようなものを作成するよう検討する。

（4）その他

今回の薬剤師調査では、慢性疾患の相談の頻度と妊婦や乳幼児の相談頻度について同列では測れない面もある。特に、妊婦や乳幼児を抱える患者が多く通うような薬局において、どのような相談が多いのかについても調査の実施に向けた検討を行うこととする。

また、海外（特にカナダ）における薬剤師職能の活用事例についても参考資料として、情報取集を行うこととする。

D. 考察

今回の薬剤師調査は、医薬品、薬物治療に関する相談以外で患者から薬剤師への相談にはどのようなものがあるかを明らかにすることを目的として実施したものである。

その結果の上位である検査値、アドヒアランス、健康食品といった相談要望の高い内容については、その相談対応のための勉強や情報収集を始めることは勿論のこと、例えば、慢性疾患の患者においては、薬を飲めていないことを医師には話せないでいるという方も多いことについて患者に情報提供し、同じような相談がある患者から相談をしやすい環境を作るなど、本調査結果

を活用して、その患者ごとにあった問題解決に向けた取組みを考えていくことも重要であると考えられる。

E. 結論

個別の医薬品や薬物治療等に直接関係がないと想定される相談に関しても、日頃から患者が相談しやすい環境を作り、その相談にしっかり対応していくことが、患者との信頼関係を築き上げるうえで大切となる。そのためにも今回、薬剤師の経験上で上位にあった患者の相談項目については、相談対応可能な知識や説明の向上を図ることが望まれる。かかりつけ薬剤師においては、患者とのコミュニケーションの中で薬に関係する負担や心配事を引き出し、患者のニーズを把握し、解消に繋げていくことでその存在意義を患者に認識してもらうことが重要である。今後、更なる調査として、調査結果を活用した相談対応に関する調査研究、健康食品への対応、妊婦や乳幼児への相談対応について調査研究を進め、カナダ薬剤師等の患者に信頼のある薬剤師事例の情報等も収集の上で参考にしつつ、患者が安心して相談できる環境作りに必要なデータ収集及びその検証を実施していくこととする。

F. 健康危険情報

特になし。

G. 研究発表

1. 論文発表

1. 能城裕希，赤羽優燿，櫻井浩子，益山光一；薬局での相談経験に関する薬剤師アンケート調査から考察したかかりつけ薬剤師・薬局に求められる機能（速報）、日本薬剤師会雑誌　第 69 巻第 11 号

2. 学会発表

1. 能城裕希，益山光一；患者からの相談対応に関するアンケート調査から考察したかかりつけ薬剤師・薬局に求められる機能、第 50 回日本薬剤師会学術大会　2017 年 10 月 8 日・9 日　東京

H. 知的財産権の出願・登録状況（予定を含む）

1. 特許取得
   なし
2. 実用新案登録
   なし
3. その他
   なし